岩手医科大学附属病院

がんとう一造む

創刊号 |wate | |Medical University

発行: 2020年 3月



矢巾新病院

センター長挨拶

令和元年9月21日の矢巾新病 院開院に伴い、「がんセンター」と して新たな第一歩を踏み出すこと になりました。これまで同様に「患 者中心の優しいがん医療の提供」 を理念に、多診療科および多職種 一丸となり、患者さん本位の最善 のがん医療の提供に努めて参りま す。がんセンターでは、「がん相 談支援センター」、「化学療法セン ター」、「緩和ケアセンター」、「が ん登録室 |、「がん診療連携室 |、「が んゲノム室」の3センター3室に 加え、「放射線治療部門」、「病理診 断部門」、「歯科治療部門」、「栄養 部門」等のエキスパートが集まり、 診療科・職種横断的ながん医療を 進めています。化学療法センター では30床に増床し、より多くの 患者さんの受け入れを可能にしま した。新病院の最上階には緩和ケ ア病棟が設置され、入院での充実 した緩和ケアの提供を行っており ます。また、当院は平成30年10 月にがんゲノム医療連携病院の指 定を受け、保険適用となったがん ゲノム医療の提供を開始しており ます。さらに「がん患者・家族サ ロン」も新病院に移りました。よ り広い空間で様々なイベントが可 能となり、個人面談が可能な個室 も兼ね備えております。これまで 通り、専従スタッフや多くのボラ ンティアの方々にご協力をいただ いており、ピアサポートの充実を 図っております。当がんセンター は、都道府県がん診療連携拠点病 院の中核組織として、がんの地域 連携の枠組みの中で様々な取り組 みを推進し、「患者中心の優しいが ん医療」を提供して参る所存です。 今後とも皆様のご支援とご協力を 賜りますようお願い致します。

がんセンター長 伊藤 薫樹



** 第12回岩手県がんフォーラム **

最新のがんゲノム医療を

止しく理解するために



令和元年 11 月 9 日(土)岩手県公会堂にて、岩手県、岩手県がん診療連携協議会、がん患者団体共催で「第 12 回岩手県がんフォーラム」を開催しました。

本フォーラムでは次世代のがん治療として注目を集める「がんゲノム」について、専門の医師らをお招きして最新の情報を発信しました。参加者はがん患者・家族に限らず、一般の方からの参加もあり、約300人を超え盛況でした。

第1部の基調講演では「動きだしたがんゲノム医療」~いかに活用するか~をテーマに国立がん研究センター中央病院先端医療課医員の小山隆文先生(写真1)より講演がありました。

ゲノムとは、遺伝子をはじめとした遺伝情報の全体を意味し、またがんは、ゲノムの変化によって起こる病気であること、がんゲノム医療の現状について講演していただきました。

第2部では「岩手県におけるがんゲノム医療の現状と今後の展望」として座長に岩手医科大学医学部病理診断学講座教授の菅井有先生(写真2)、パネリストに国立がん研究センターの小山隆文先生、岩手医科大学医学部より産婦人科教授馬場長先生、医歯薬総合研究所医療研究開発部門特任教授西塚哲先生、臨床遺伝学科助教小畑慶子先生と専門の先生方(写真3)が登壇し、それぞれの立場で最新のゲノム医療についてパネルディスカッションが行われました。がんゲノム医療は魅力的な新しい診療法ではありますが、良い点と問題点について話し合われました。

参加者から現在治療中の家族について切実な質問もあり、ゲノム医療への関心の深さが伺われました。

閉会の挨拶を行った岩手医科大学附属病院のがんセンター長の伊藤薫樹教授より、がんゲノム 医療は始まったばかりで治療例がまだ少ないが、今後もっとも期待される医療であること、岩手 県では唯一、岩手医科大学附属病院で受診できるとの説明があり、我々を信頼していただき診療 を受けてほしいとのお話がありました。



(写真1)



(写真2)

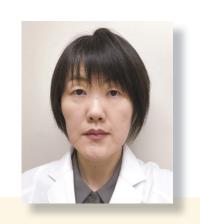


(写真3)



遺伝カウンセラーってなに?

臨床遺伝学科 小畑 慶子



認定遺伝カウンセラー [®] は、「質の高い臨床遺伝医療を提供するために臨床遺伝専門医と連携し、遺伝に関する問題に悩むクライエントを援助するとともに、その権利を守る専門家」と定義される専門職です。遺伝カウンセラー認定養成課程を設置した大学院修士課程(2年間)を修了することにより、認定遺伝カウンセラー認定試験の受験資格を得ることができます。令和元年12月で267名が全国の病院や企業などで活躍をしています。当院では臨床遺伝科で2名の認定遺伝カウンセラー [®] が、臨床遺伝専門医、専任看護師とともに働いています。主な役割に遺伝カウンセリングがあります。遺伝カウンセリングでは、ご本人が抱える遺伝に関する問題や不安に対して、相談や情報提供をすることにより、ご自身がその状況を理解して解決していくことを支援します。その内容は大きく分けると、出生前診断、遺伝性疾患、遺伝性腫瘍があります。患者さん・当事者以外に、配偶者やご家族の方とも遺伝カウンセリングを行います。

遺伝に関する病気は予防や治療法がないことが多く、遺伝の話や遺伝子検査は慎重に対応すべき内容です。一方、がんの遺伝性に関する情報は、早期発見・早期治療につながり、また最近は遺伝性に基づいて使われる薬があり、新たに効果がある薬が見つかる場合もあります。このように遺伝情報は医学的に有用性が大きく有意義な情報であり、積極的に利用しようと考えるようになってきています。ただし遺伝情報については、本人を含め知る権利・知らないでいる権利がありますので、それぞれの状況毎に個別に対応していきます。がんに関わる遺伝カウンセリングでは、遺伝性腫瘍、遺伝子検査、ご家族について、ご本人とご家族の検診サーベイランスや今後の方針などについて、一緒に話し合い、考えていきます。また、これらの遺伝情報を活かして治療や予防を行えるよう、がんセンターや各診療科とともにサポートをしていきます。

がん診療のひとつとして、遺伝の話題や遺伝カウンセリングが身近になればと思っています。がん患者・家族サロンにもこれから積極的に伺ってまいります。われわれ臨床 遺伝科スタッフに、お気軽に声をおかけください。どうぞよろしくお願いいたします。

がん相談支援センター

がん相談支援センターは、がん医療に対する患者さんとご家族の不安と、信頼できる情報がほしいという要望から生まれた全国のがん診療連携拠点病院に設置されている相談窓口です。①誰でも(院内・院外を問わず、患者・家族を問わず、必要なら匿

名で)無料で利用でき、②相談員が信頼できる情報を探し、③相談者に寄り添い、困りごとを一緒に 考え、解決できるよう支援し、④医師、看護師等と相談者の橋渡しを行うところです。当院では、1 階患者サポートセンター内に設置されております。

「がんの疑いがあり、大きな病院で検査するように言われたが、どこに行ったらよいかわからない」「担当医に質問をしたいが、きっかけがつかめない」「これからどのような検査が必要か、今後の流れを知りたい」というような診断についての相談や、「自分のがんの「標準治療」について詳しく知りたい」「手術をしたらどれくらいで退院できるのか」「自分のがんについて、もっと詳しい情報を入手したい」「先進医療・臨床試験とは何か、自分も受けられるか」「セカンドオピニオンを受けるにはどうしたらいいか」「緩和ケアとはどんなことをしてもらえるのか」といった治療や病院の選択に関する相談、「医療費が不安」「仕事と治療を両立できるか心配」「自宅で療養するために訪問看護を頼みたいが、どうしたらよいか」といった療養生活に関する相談など、さまざまな相談がよせられております。

生活のことや、治療や療養に伴う疑問や不安を誰かに話すことには抵抗があるかもしれません、また相談すると担当の先生がよく思わないのでは、と心配される方もいらっしゃいます。そんなときは、そのご不安を含めて、相談員にお話しください。相談員が、そのお気持ちに配慮しながら相談にあたらせていただきます。

がんの診断から治療、その後の療養生活、さらには社会復帰と、生活全般にわたって、疑問や不安 を感じた時、一人で悩まず、気軽に「がん相談支援センター」にご相談ください。

(医療福祉相談室室長 近藤 昭恵)

化学療法センター

化学療法センターは、リクライニングチェアーが30台と増床し、個人の空間を大事にして、ゆったりして治療ができます。外来で化学療法ができる利点は、ライフスタイルを大切にして仕事もしながら治療できる点です。しかし、治療が多様化してきていますので、症状も個々それぞれ違いがあり、患者さんは職場や自宅でつらさや不安が生じてくると思います。そのため、患者さんの治療



中に生じる症状に関することや不安に思っていることなど、看護師や薬剤師がじっくりとお聞きます。そして、医師や薬剤師、看護師で解決できるように検討します。また、遠方から通院する患者さんや不安な気持ちを感じている患者さんとご家族の方に対して電話でサポートもしています。自宅でも、安心して通院治療ができるように様々なスタッフが関わり支えて行きたいと考えています。化学療法に関して心配になった時や不安な時には、お気軽にお声をおかけください。

(化学療法センター主任看護師 澁谷 幸子)

緩和ケアセンター

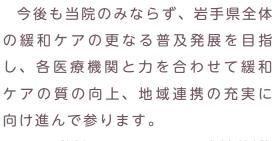
緩和ケアとは、がんをはじめとする様々な病気の治療経過中に認められる、体や心のつらさを和らげ、患者の皆様やご家族の生活の質・人生の質を改善し、安定させることを目指す医療です。緩和ケアは病気の終末期にのみ行われるものではなく、現代では、疾患や



病状によらず、どの時期においても提供されるべき医療であると考えられております。当院におきましても、患者の皆様の各々の症状や状況に合わせた医療・ケアを提供することで、お一人お一人がご自身らしく過ごされるよう、緩和ケアの充実に当たって参りました。

当院では平成 19年に活動を開始した「緩和ケアチーム」を中軸として、平成30年に「緩和ケア外来」、「緩和ケア病棟」、「緩和ケアリンクナース」の機能を統合した「緩和ケアセンター」を設立し「切れ目のない緩和ケア」の実践力を高めてまいりました。各診療科で治療中の患者の皆様に対しては、「緩和ケアチーム」が中心となり主治医、緩和ケアリンクナース、病棟スタッフとの協働により診療にあたり、また、当院あるいは他院に通院されている方に対しては、「緩和ケア外来」が対応しています。また、令和元年9月には新たに「緩和ケア病棟」を開設し、症状の比較的重い方の支援がより切れ目なく提供できるようになりました。こうした緩和ケアの実践には、多くの専門医療職の協力が欠かせませんが、当院では、がん治療に精通した医師、麻酔科医師、精神科医師、専門・認定看護師に加えて、放射線科医師、歯科医師、薬剤師、リハビリテーション科、公認心理師、管理栄養士、医療ソーシャルワーカーが協同して診療にあたっています。特に緩和ケアに関連する専門・認定看護師数は12名と日本トップクラスを誇り、緩和ケアチームや緩和ケア病棟のみならずほぼすべてのがん治療





(緩和ケアセンター長 木村 祐輔)



闘病体験記

だれかのために

一般財団法人 岩手済生医会 岩手看護専門学校 岩手看護高等専修学校

事務長 芳賀 真理子

(前:岩手医科大学附属図書館 図書館事務室長)



「がん」に2度罹患したが、ろくな闘病もしていない。そんな私に闘病記をというのは気の引ける依頼だが、「がんになっても仕事を続けていけることを多くの人に知ってほしい」と言われ引き受けた。そもそも仕事を辞めるという選択肢は私の中にはなかった。ただ、事実を受けいれるまでにはかなりの葛藤があった覚えはある。

最初は「子宮頚がん」。40歳で子宮を全摘した。一番下の子は7歳、死ぬわけにはいかない。 元の生活をすることだけを考えていた。手術して職場復帰するのは当然だった。

しかし、とにかく安心したかった。専門書を読み漁り少し安心。続いて闘病記に手を出したが、 著者は特別な人に思え、共感することができず失敗だった。当時の私は岩手医大図書館に勤め ていたので、その類の本には困らなかった。何かしらの確証を得て安心するために、ひたすら エビデンスを求めた。術後1ヵ月で職場に復帰した。

「がん」という病気はどうしても「死」を考えないわけにはいかない。早期だろうが末期だろうが、その事実が重くのしかかる。

10年の時を経て、2度目は「大腸がん」だった。しかも血管と脈管に浸潤があり、最終的に 横行結腸を20cm切除し、退院後イレウスで再入院したものの術後1ヵ月で復職した。

40年ぶりに再会した友人は、同じ子宮がんからの復活だった。子宮全摘。続く化学療法ですっかり髪は抜けウィッグをつけ、利き手骨折というおまけつきで当たり前に編集の仕事を続けた。 奇しくも医大 120 周年記念誌で一緒に仕事をする機会を得た。二人で「手術の翌日から歩かされたけど痛かった」「看護師さんは優しいけど怖かった」「あの検査は苦痛」と、止まることなく明るい「がん」体験談で周囲にはあきれられ、何も変わらず接してくれた職場の仲間に支えられて救われた。

世の中持ちつ持たれつ。私も今なら頼られても支えられる。大学を定年退職し、厳しいけれ ど優しい看護師を養成する看護学校で仕事をしている。救ってもらった命。社会の中で役に立 てるうちは仕事をしたいと思う。





令和元年 11 月 28 日 (木) に岩手医大矢巾キャンパスの災害時地域医療支援教育センター においてボランティア研修会を開催しました。

参加者 20 名がサロンでボランティアとして活動するための基本的な事項を学びました。

第1部「ボランティアのこころえ」

------- 医療福祉相談室 近藤 昭恵



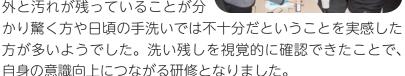
ピアサポーターにとって大事なことや知っておきたい基礎知識について、対応の良い例悪い例の映像を見ながら、わかりやすく講義していただきました。傾聴・受容・支持が大切であることは、頭では分かっていても継続して実践するのは難しいものです。研修会では毎回講義していただいている内容ですが、日頃の活動を振り返りながら、熱心に講義を聴く参加者の皆さんの様子が見られました。

第2部「感染症対策について」

手指衛生が必要な理由や手指消毒の手順などについて、演習を交えながら講演していただきました。手洗いの演習では、参加者1人1人がいつも通りの手洗いをした後に、洗い残しが分



かる手洗いチェッカーのライト で自身の手を照らしました。意 外と汚れが残っていることが分



参加者の声 ………

- ●相手のペースで相手を否定せず話をよく聴く等、なかなか出来ない事だと思いましたが、これからは心がけてピア(仲間)を大切にできるようにしたいです。
- ●動画での具体例がわかりやすくて良かったです。相手の心に寄り添う ことを心がけたいと思います。
- ●改めてボランティアのあり方の大切さを思いました。
- ●今回のような実践型の研修は、聞くだけの研修よりとても充実したものだと感じました。
- ●サロンも広いスペースとなり、期待が大きい中でどの様に患者さんを 取り込んだ運営が出来るか?と考えました。



がんサロンスタッフ 交替のあいさつ

私は1月末をもって専従スタッフを退くことになりました。 患者さんやボランティアの皆さんから様々なご支援や贈り物 をいただきとても感謝しております。「話をして気持ちの整理 ができたと思う」「病気になってから初めてこんなに笑った」「話 を聴いて欲しくて訪ねました」などの言葉をこれまで沢山頂け たことを非常に嬉しく思っております。至らないことも多々あった と思いますが、多くの出会いがあり、皆さんと貴重な時間を共有で きたことに、深く感謝いたします。
専従スタッフ 菊池リミ子

新しいスタッフで 引き続きサロンでお待ちしています! (高橋・神原)



左から高橋さん、神原さん

がん患者・家族サロン



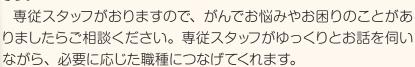
がんサロンも矢巾に引っ越しました。

矢巾新病院への移転から約3ヶ月経ち、がん サロンも少しずつですが軌道に乗って参りまし た。新病院での場所は、2階化学療法センター の向かい 20 番がんサロンとなっております。

端っこなので少しわかりにくいかもしれませ んが、その場合は総合案内でお聞きください。

> 開設時間は 平日10:30~16:30 です。





また、このたび環境が整いましたので、イベントやよろず相談 も徐々に開始いたします。

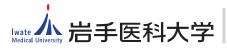


12

皆様からのご協力をいただき、がんセンターだより創刊号を無事に発行することができま した。ご協力・ご支援頂いた皆様に深く感謝いたします。今後とも「がんセンター」をよろしく お願いいたします。 (がんセンター事務室 藤川優美子)

ホームページ

http://www.iwate-med.ac.jp/hospital/gancenter/



| 間 岩手医科大学附属病院 がんセンター TEL 019-613-7111 | | 場合 岩手医科大学 | 岩手医科大学 | 岩手 医科大学 | 岩手 医科大学 | 岩手 県 紫波郡 矢巾町 医大通二丁目 1-1